

自閉症児の親面接の新しい役割

——子どものメンタライゼーションと自己の組織化を
促すアタッチメントと親の映し返し機能に着目して——

吉田弘道・高田夏子・乾 吉佑

I はじめに

発達心理学の領域において、この20年の間に社会的発達モデルの観点に立つ研究が急速に進み、児童心理臨床に有益な知見が多く集まってきている。感情発達や情緒発達について、これらの知見が示唆しているところを一言でいうなら、人の感情は、乳児期からの他者、特に母親との相互作用を通して発達するということである。相互作用の研究は、アタッチメントの概念(Bowlby, 1969)を中心に進められているが、Ainsworthら(Ainsworth et al. 1978)がアタッチメントの質の評定方法を開発して以来、母子の相互作用と感情発達に関する研究はますます盛んになっている。Ainsworthらは、アタッチメントの質を、安定(secure-attachment: タイプB)、不安定-回避型(anxious-avoidant attachment: タイプA)、不安定-反対感情並存型(anxious-ambivalent/resistant attachment: タイプC)の3つに分類した。その後Mainら(Main et al. 1986)が新たにもう一つの不安定-非組織型・非方向型(anxious disorganized /disoriented attachment: タイプD)を加え、4タイプで検討されている。このようなアタッチメントの質と感情発達との関係については多くの研究がなされている(吉田 2000 a)。たとえば、母親との間に安定したアタッチメントを形成している幼児(タイプB)は、身体的な興奮を調節する能力、および、感情の自己制御の能力が高く、また、感情を分化して感じることと表現する

ことがよくできるということである(van-der-Kolk & Fisler, 1994)。これには親子の相互作用が反映されている。すなわち、子どもの情緒状態や考えていること、欲していることに関心をもって言葉でふれる相互作用、そしてまた、感情について話をすることが多い親子の相互作用が、子どもの自己の感情を語る能力と、他者の感情を理解する能力を高めるということである(園田, 1999; Dunn et al. 1999)。

吉田(2000b)はこのような研究で明らかにされた親のかかわり方を児童心理療法に応用する試みを続けている。さらに最近では、自閉症児や広汎性発達障害児の心理療法にも応用できると考えている。というのは、自閉症児や広汎性発達障害児は、感情発達や感情統制だけでなく、人格の統合性の発達においても障害があるが、この点にアプローチするのに役立つアタッチメントと情緒的自己制御(emotional self-regulation)の関連性を論じる研究が増えており(Calkins, 2004)、また、アタッチメント理論と精神分析理論を統合した理論が提出されてきているからである。特に Fonagyらの研究は、障害児の人格統合をねらったかかわりに有益であると考えられる。

Fonagyら(Fonagy et al. 2002)は「メンタライゼーション」(mentalization)とそれを推進する「映し返し機能」(reflective function)の概念を提起した。mentalizationは造語であり、「精神化」「心になること」と訳してもわかりにくいので、そのままメンタライゼーションということにする。メンタライゼーションとは、子どもが他者の行動、信念、感情、態度、願望、希望、知識、想像、ふり、嘘、意図、計画などに応じることを可能にする能力、他者の心を読むことを可能にする能力、他者の行動が意味づけられ、予測可能なものにする能力と説明されている。この能力は、子どもが親との愛着関係において、両者の間の出来事を解釈する際に行われていることである。さらにメンタライゼーションは、他者の心だけでなく、子ども自身の心にも関係することである。子どもが他者の心を統覚するこ

とが自己の心的状態(mental states)を自覚する能力につながるし、子どもは他者の行動の意味を探ることによって、自分自身の心的体験を意味づけることができるようになるからである。またメンタライゼーションは、子どもの自己および他者の心的状態を想像する能力とも関係する。さらにメンタライゼーションする能力は、自己の組織化(self-organization)および情動調節(emotional regulation)の主たる決定因であるとも考えられている。

もう一つ概念である映し返し機能は、母親が信念、感情、態度、願望、希望、知識、想像、ふり、嘘、意図など、子どもの心的状態に関心をもち、言葉と態度で触れて子どもに返す機能である。この機能が、子どもの感情発達や情緒調節の能力を高めることに役立ち、さらに、子どもの自己としてのまとめ、すなわち自己の組織化(self-organization)の発達を促すとされている。そのため、当初は reflective self function とされたが(Fonagy et al. 1991)、その後 reflective function と簡略化された経緯がある(Fonagy et al. 1997)。自己の組織化は、情動調節、衝動統制、自己モニタリング、自己を体験すること、が基礎的要素であるが、映し返し機能は、メンタライゼーションを高め、自己の組織化も高めることになるという。一方でまた、映し返し機能は、母親が自己の心的状態を分かりやすく子どもに伝えることも含んでいるので、この映し返しがなされると、子どもは母親の心的状態が理解しやすく、これが翻って、自己の組織化を高めるという循環的効果があることになる。

上述したことから予測できることではあるが、映し返しを適切に行っている親に育てられている乳幼児は、安定したアタッチメントを形成していることが多く、そのような幼児は、不安定なアタッチメントを形成している幼児に比べて、「心の理論」(theory of mind)がより発達していることが確認されている(Fonagy, 1997)。以上のような Fonagy らの主張は、古くは人格の構造化に果たすアタッチメントの役割を初めて強調した Sroufe と

Waters(1977)の主張を発展させたものといえるが、それをより細かく理論化している点で貴重であるといえる。

筆者らは、このような理論を基盤としながら、映し返し機能を障害児の心理療法の中で応用し、より安定したメンタライゼーションの発達と、自己の組織化を援助する試みをしているが、これに対応した形で親への援助を行うことも必要であると考えている。

これまで自閉症児を育てている親へのアプローチの主眼は、家族支援プログラムとして、主に、自閉症の障害と発達への理解を促すこと、家庭訪問やお便り帳などの交換をとおして家庭での療育の質をあげること、そして、家族の精神保健に関する支援である(永井洋子, 2002)。しかし、自閉症の問題の中核が、コミュニケーションや社会的相互作用の異質性、特に、相互的なやり取りにおける主導性や相互性の点における特殊性であることが明らかにされるようになってきていること(Schopler et al. 1993)、そしてまた、自閉症の状態が生理的な障害と社会的環境因子の両方の影響を受けているという指摘(Whitman, 2004)を受けて、親子の適切な相互作用の発展をねらった、親への早期からの積極的な働きかけが必要であるとされるようになってきている(山崎, 1998)。これらは自閉症対応における時代の変遷である。このような動きを背景として、自閉症児の親子への早期からの取り組みが行われるようになってきている。たとえば小林(2000)は、自閉症児の母子の関係障害、そして愛着形成障害に着目した、母子ユニット(Mother-Infant Unit)での、発達早期からの自閉症の母子への取り組みを報告している。そこでは親と子の間に流れる情緒的な意味の汲み取りと、それを親に伝えることにより、親子のかかわりを調整することを通して、親子のアタッチメントの形成、情動調律、子どもの情動自己調節、親子の分化などが重視されている。同じく、河合ら(2003)も、1歳6カ月の自閉症児とその母親への母子同室面接での、心理療法を報告している。

本論文は、自閉症児の親面接の報告であるが、母子同室面接ではなく、

母子並行面接における報告である。吉田が面接を担当したが、従来の親面接者の役割である、子ども理解を促進する役割、子ども面接の維持をサポートする役割に加え、子どものメンタライゼーションと自己の組織化の発達を促すために、母親の映し返し機能を高める対応を行った。面接過程における母親のアタッチメントと映し返し機能の動き、および面接者の対応について報告するとともに、母親の映し返し機能の重要性と面接者の対応の工夫について考察する。

II 面接経過

1. 事例概要

事例は、筆者らが所属する心理相談室の事例である。相談開始時小学校2年生の8歳男児である。3歳のときに自閉症と診断されている。在胎週36週の早産で出生している。出生時体重は2544gであり、保育器に20日入っていた。酸素吸入を受けたが、体動を抑制するために睡眠薬の投与を受けている。乳児期の発達は、お座り6ヵ月、つかまり立ち9ヵ月と、運動発達には特に問題はなかったようである。しかし、親子の情緒的関係においては、母親を目で追うことが不明瞭、人見知りなし、母親が顔を見せても知らん顔をするというように、関係形成が不確かであった。その後1歳時になっても、指差しをしない、言葉が出ないなどの、精神発達の遅れがはっきりとしてきた。母子関係についても、関係障害が明確になってきた。

面接初期に実施した乳幼児精神発達質問紙を用いた評定では、運動領域5歳半、探索領域4歳半、社会領域2歳半、生活習慣領域5歳、言語領域3歳半であった。また新版K式発達検査の発達指数は、姿勢・運動領域35、認知・適応領域40、言語・社会領域32、全領域36であった。1年半後に乳幼児精神発達質問紙の再検査結果では、運動領域6歳、探索領域5歳、社会領域2歳半、生活習慣領域6歳、言語領域4歳であった。

家族は、両親と本児、5歳下の弟の4人である。

なお、本研究の趣旨を親に説明し、研究同意書を交わした上で、研究を開始した。

2. 面接経過

小林(2000)や河合ら(2003)のように、母子同室で面接を行うことも考えたが、子どもの年齢が高いことと、子どもには子どもの発達を促す対応を子ども担当者が行うことを考えたことから、母子別室で並行面接を行うことにした。相談室まで通うのが遠かったので、面接は月に1回から2回のペースで行われた。

以下に面接経過を便宜上、面接前期(最初の5ヵ月間)、面接中期(6ヵ月から11ヵ月まで)、面接後期(1年から1年7ヵ月)の3部に分けて報告する。なお、経過は、本研究の目的に沿って、主に親子関係を中心に整理した(表1, 2, 3)。

(1) 面接前期(最初の5ヵ月間)

前期の面接経過は表1に整理してある。1回から3回までは子どもの発達経過と現時点での発達状態を理解することを中心とする面接であったが、その中で、母親と子どもの間で情緒的関係の行き違いがあり、それに対して母親が苦慮していることが語られた。関係性の障害は自閉症児の特性からくるものではあるが、母親の話からは、親と子の気持ちのずれから関係性の障害が助長されている観があった。すなわち、面接1-①「この子の目線から、抱きしめてほしいのかなと思うことがあるが、抱きあげようとするすとすーっと向こうに行く」、面接1-②の「煮詰まってしまう」、面接2-④の「ピュアーに反応する、こっちを見抜いている、こっちが見抜かれている」などの発言がそうである。しかし、母親は関係を求めているし、子どもの方も関係を求めている。そこで、面接者が2-④で〈お互いに関係はある〉〈しかし感情が絡み合っている〉〈近い距離にいて絡み

表 1

	母親の話と、それに対する面接者の対応 〈 〉は面接者の発言
1回	<p>①この子の目線から、抱きしめてほしいのかなと思うことがあるが、だき上げようとするすとすーっと向こうに行く。私が居た部屋に私が居なくなった後から居る、私が座っていた椅子に後から座る、ということが最近ある、それで私が行くとよける</p> <p>②「煮詰まってしまう」、〈どんな気持ちか〉、考えの疎通がしたいのに子どもに逃げられる感じがする、子どもからの手ごたえがない(関係を求めている)(しかし)私が厳しくしかったときに、珍しく泣きながら私の懐に入ってきてくれたことがあった、救われた気分になった、驚いた</p>
2回	<p>①入学後、しかられたときに「ごはん」といってきて食べさせてもらう、コミュニケーションの手段だと思う、〈そうですね、そして甘えの手段なのでしょう、いやな気分を解消しているのでしょうか〉</p> <p>②私の横に寝ることは少ないが、たまにあるときには、私の脚に脚で触ってくる</p> <p>③子どもが泣いているときに「お母さんも悲しいんだ」と言ったら、泣き止んでくれた、私の手を取りに来てくれた、顔をのぞきに来てくれた</p> <p>④ビューアーに反応する、こっちを見抜いている、こっちが見抜かれている(3回もいう) 〈お互いに関係はある〉〈しかし感情が絡み合っている〉〈近い距離にいて絡み合っている〉</p>
3回	<p>①前に来たときに、「お母さんとつながっています」と言われて、気持ちがとっても楽になった、それまでは、両方が監視しているという感じだった</p> <p>②意思表示が増えてきた、子が「かわいいね」といってくるが増えてきた、「いい気持ち」「うれしいね」と言う、人への関心が増えてきた、人を見ている</p> <p>③まだ質問には答えないが「ドライブしたいんだね」と聞くと、笑う</p> <p>④甘えてくる、かわいらしくなった、私が怒っていたら、泣いて私の脚にしがみついてくる(前なら一人で布団に入ったが)、しかって片付けさせたら、その後ずーっと私の隣に居る、そして、くっついてきて、それから、私の隣で寝た</p>
4回	<p>①ため泣きをする、急に何かを思い出して、うーっと泣き出す、「おいで」と言うと、このごろ来られるようになった、だっこしてとんとんしてやる(目に涙)、〈そうですね、何かを思い出しているんでしょうね、悲しいね、とってみることも〉</p> <p>②子どもが「教室いこうか」と言ったのでびっくりした、ふざけて言葉遊びをする、スモモを「たもも」、アンニンドウフを「アナニンドウフ」と言って弟と二人で笑っている</p> <p>③「よくすねる」について、わざと気を引くようなことをする。 〈わざと気を引くことと、すねることがまざっているようである〉、自分は悪いほうに考えすぎてしまう、あの子は私を困らせようとわざとしていると。この子には要求が厳しすぎた</p>

5 回	<p>(今回発言を整理した表を渡す)</p> <p>①言葉の表現力がついた、自己主張がはっきりしてきた、(例)ドライブしていて、私が「もうそろそろ帰るよ」と言ったら、「右」「左」と言い始めた、初めは「帰りたくない」ということかなと思ったが、道を覚えていたんだとわかった、帰りたくない、帰る、という主張がはっきりしてきたのだと思う。 〈お母さんが、そのように理解することが、子ども自身がそうだなと理解することを助ける〉</p> <p>②子どもにいらいらさせられることがなくなった、目標、方向性がわかるようになったからだと思う</p> <p>③ひざに乗っていることが増えてきた、ベターっとすることが増えてきた</p>
6 回	<p>①友達の遊びの中に入りたい気持ち強い、しかし、入れなくて泣いていた。(友達への関心)</p> <p>②ぱっと自分の世界に入りたいときがある、ぱっと切り替わる(絵、マーク、文字、を書く、切り張りをする)(肯定的にみている話)。</p> <p>③この子がテレビを見ていて、その場面を再現している、そのことを理解して、その場面に流れる音楽を私が言ったら、私にベターっとくっついてくる、私もうれしい、この子の世界に私が入り込まないといけないですね〈そうですね〉</p> <p>④私が弟を抱くと「ふーん」という感じで斜めに見ている</p> <p>⑤わざととしてはいけないことをする、かかわってほしいときに困らせることをする、私が怒ったときに敏感に反応する、〈かわりがあるのが、楽しいときや遊んでいるときではなくて、親に何かさせようとするときと、いやなことあるときのような〉</p> <p>⑥走っていても、私が追いかけてくれるのを、止まって待っている(分離—個体化の行動)</p>

合っている)と明確化した。これに対して母親は、この発言の中の〈お互いに関係はある〉を拾い、面接3-①「前に来たときに、『お母さんとつながっています』といわれて、気持ちがとっても楽になった、それまでは、両方が監視しているという感じだった」と、気持ちが楽になっている。いうなれば、「煮詰まっている」状態、「絡み合っている関係」から脱出して、少し余裕のある動きが見えたことになる。そして、3-②「子どもが『かわいいね』(これは、「好きだ」という意思表示であるが)と云ってくることが増えてきた」、④「甘えてくる、かわいらしくなった」などの肯定的な関係の話が増える。母親が、子どもの甘え行動(関係を作ろうとするアタッチメント行動であるが)をそのままにとらえ、母親も「かわい

い」という母親からのアタッチメント(マターナル・アタッチメント)が動き出すという連動した心の動きが見られた。

このような母子双方からのアタッチメント形成への動きがあらわれると、意思の疎通がわかりやすくなった。3-②「意思表示が増えてきた」、4-②「子どもが『教室いこうか』といたのでびっくりした」、5-①「自己主張がはっきりしてきた」との発言がそれを示している。また、母親の方から子どもの心的イメージへの接近も始まった。6-②「ぱっと自分の世界に入りたいときがある」と肯定的にみながら発言、6-③「この子がテレビを見ていて、その場面に再現している、そのことを理解して、その場面に流れる音楽を私が言ったら、私にベターっとくっついてくる、私もうれしい、この子の世界に私が入り込まないといけないんですね」などである。これは心的イメージを共有して楽しむことであるが、他にもこのことをあらわしているのが、4-②の「ふざけて言葉遊びをする」である。「アンニンドウフを『アナニンドウフ』と言って笑う」である。これは、弟とのかかわりではあるが、母親との間でもある。親子がともに「アンニンドウフ」であることを了解していながら、わざと「アナニンドウフ」と言って笑っているのであるから、イメージを共有して遊ぶことである。

このほかに、母親は、関係がこじれているように見えるときでも、知らず知らずのうちに、映し返し機能的かかわりをしている面が観察できた。すなわち、2-③「子どもが泣いているときに『お母さんも悲しいんだ』といたら、泣き止んでくれた、私の手を取りに来てくれた」という発言がそれである。これはまだ母親本人の内面の表現であり、吐露であるが、それでも、素直にできところがよい点であろう。3-③「まだ質問には答えないが『ドライブしたいんだね』ときくと、笑う」は、子どもの意思・欲求に対応している発言であり、映し返しである。4-①「ため泣きをする、急に何かを思い出して、うーっと泣き出す、『おいで』と言うと、こ

のごろ来られるようになった、だっこしてとんとんしてやる(目に涙)」の発言も、言葉にしていないが、子どもの感情に対応しようとしているかわりであり、映し返しである。面接者は〈そうですね、何かを思い出しているんでしょうね、悲しいね、と尝试してみることも〉と、母親の行いを支持しながら、さらに教育的にかかわった。また、5-①「ドライブしていて、私が「もうそろそろ帰るよ」と言ったら、「右」「左」と言い始めた、初めは『帰りたくない』ということかなと思ったが、道を覚えていたんだとわかった、帰りたくない、帰る、という主張がはっきりしてきたのだと思う」に対しても、〈お母さんが、そのように理解することが、子ども自身がそうだと理解することを助ける〉と伝えた。母親の映し返し機能を高めるには、面接者のこのような直接的な教育的かわりだけでなく、母親自身の気持ちや、不安、意思に対して触れ続ける態度が大切である。面接者は、整理表には現れていないが母親の気持ちに共感的に対応した。ほかに、1-②で、〈どんな気持ちか〉と明確化した。また、4-③「よくすねる」についてたずねると、わざと気を引くようなことをする、というので、〈わざと気を引くことと、すねることがまざっているようである〉と明確化すると、母親は、「自分は悪いほうに考えすぎてしまう、あの子は私を困らせようとわざとしている」と話した。

このように面接前期では、発達理解を深める作業と、母子の相互作用の現状分析、そして、相互作用の変容を意図した話し合いがもたれた。このようなプロセスの中で、母親から、面接5-②「子どもにいらいらさせられることがなくなった、目標、方向性がわかるようになったからだと思う」というような発言も見られた。しかし、普通の親子もそうであるが、親子の間ではいらいらさせられることがたびたび起こるものである。そのたびに、親は悩むものであるが、母親からも、6-⑤「わざとではいけないことをする、かかわってほしいときに困らせることをする、私が怒ったときに敏感に反応する」と苛立ちが表現される。これに対して面接者は

〈かわりがあるのが、楽しいときや遊んでいるときではなくて、親に何かさせようとするときと、いやなことがあるときのような〉と明確化した。これは母親の相互作用理解を助けるための発言であった。

(2) 面接中期(6ヵ月から11ヵ月まで)

母親の映し返し機能は続いている。面接7回目の②では「弟に乗られて嫌だったよう、そこで『上に乗られていやだったの? イヤと言いなさい』と言ったら、次には『イヤ、言いなさい』と言っていた」の発言は、子どもの気持ちについて共感し、その気持ちを「いやだったの?」と言語化した上で、「イヤといいなさい」と教えてやっていることになる。母親の対応が的確だったので、子どもは、母の教えをすぐに覚えて使っている。また、8-④「弟に怒っているときに、『そんなに怒らなくてもいいんだよ』と言いながらとんとんしたら、私のひざに顔をうずめた」というのも、気持ちに言及してやりながら、並行して怒りが治まるよう情動調節をしてやっていることである。面接者はこのように話す母親に対して、〈慰めながら、そういうように、気持ちを言ってやることはいいですね〉と応援した。さらに面接者は、母親の気持ちについても共感し、映し返しをした。たとえば、12-②「こちらが発することを子どもが理解してくれなくて、いらいらすることがある」と母親がいうので、面接者は〈子どもが、お母さんに伝えようとして伝わらなくていらいらすることもあるのでしょう、お母さんが伝えようとして伝わらなくていらいらすることもあるのでしょう〉と言った上で、〈今後伝わることは増えてくると思う〉と先の見通しを言った。

このように母親が子どもに共感的に対応していると、これに呼応するかのように、子どもの側も親の気持ちに共感するようになってきた。7-⑤「私の感情に反応する。私が泣いていると子どもはトーンを落とす、私がうれしいと『かわいいね』と言ってくる」というように。これは、子ども

表 2

	母親の話と、それに対する面接者の対応　〈 〉は面接者の発言
7回	<p>①予定が違おうと確認してくる、(例) 弟が今日調子が悪くて相談についてこれなかった、それで相談にいかないのではないかと思ったのか「今日学校？」と確認してきた</p> <p>②弟に乗られて嫌だったよう、そこで「上に乗られていやだったの？ イヤと言いなさい」と言ったら、次には「イヤ、言いなさい」と言っていた</p> <p>③鼻血が出たので世話したら、うれしそうにしていた。具合が悪くなると世話されるのでうれしそうにする。足が痛かったようで、「イタイイタイ」という、私が手を見せて、「この手で教えて」と言ったら自分の足にその手を持って行って「イタイイタイ」と言った、「いたいいたい飛んでけー」と言ったらニコニコしていた(前は教えてくれなかった)</p> <p>「すすすき」と言う子どもが逃げていく、でも、タイミングをみて子どものペースに合わせればいいことが分かった、学童保育で「お母さんお迎えるかな」と言っていたと聞いてびっくりした</p> <p>④私と弟の会話をよく聞いている</p> <p>⑤私の感情に反応する(例) 私が泣いていると子どもはトーンを落とす、私がうれしいと「かわいいね」といつてくる</p>
8回	<p>①運動会で最後まで走った、「偉かったね」「頑張ったね」と言う、うれしそうにしていた</p> <p>②学童保育で、しりとりができる、表情が増えた、学校の話をすると思えてくれる、「ママ」と言うことが増えた、迎えに来るのを待っている、と言われた</p> <p>③遊ぶことを求めてくる(前は食べ物を求めることで相手をさせることを引き出していた)、そのため意外と食べるものが減った</p> <p>④「かわいいね」と言うことが増えた(気持ちがいいとき)、「そうだね」と言う、にこにこしている。弟に怒っている、「そんなに怒らなくてもいいんだよ」と言いながらとんとんしたら、私のひざに顔をうずめた、〈慰めながら、そういうように、気持ちをいつてやることはいいですね〉</p> <p>⑤遊びに行つて、待ち合わせ場所を教えたら、そこで待っていた(それまでは、私の目の前から消えることはなかったが)(自我発達と、分離—個体化)、思い通りにいかなくて地団太を踏んでいるときもある、(大変なので)そんな場面を(相談者に)見てほしいくらいだ</p>
9回	<p>①弟を羽交い絞めにする、口を押さえる、それで私が強くしかつた。その後近づく来ない。私は、嫌われていると思つて、さびしさを感ずる。夜になつて、自分のそばに来るかなと思つていたら、やつてきた。しかし、また離れていった</p> <p>②不安が一杯ということで、次の週に母親だけの面接をいれた</p>
12回	<p>①弟とのやり取りで子どもが負けて離れていくと、気の毒になる</p> <p>②私の方が子どもにかかわりを求めたい気持ちが強くなつてきた、子どものことを知りたい、この子の世界を知りたい、付き合いたいという気持ちが強くなつてきた、それなのに、こちらが発することを子どもが理解してくれなく</p>

	<p>ていらいらすることがある。〈子どもが、お母さんに伝えようとして伝わらなくていらいらすることもあるのでしょう。お母さんが伝えようとして伝わらなくていらいらすることもあるのでしょう〉〈今後伝わることは増えてくると思う〉</p> <p>③自分と一緒に居るときより他の人と一緒に居るときのほうが楽しそうにしている。〈プレイを見ていると、子どもの気持ちが高まって高まってきたときに、それに合わせて子ども担当者の気分が高まると、子どもの発声が増える。そういうことがお母さんとの間では少ないかもしれない〉先に先にと考えて、これを教えよう、あれを教えようとしてやってきた、自分がしっかりしなければ、と思いながら相手をしてきたので、楽しいとは思えなかった〈そういうことはよくあることですね〉</p>
13回	<p>①子どもが要求してきたときに(教えようとして)「口で言ってごらん」と言うので、要求してこなくなったのか? その一方で、わかってさっさと対応することをしていた</p> <p>②体調が悪くときに、おんぶ、だっこ、話しかけをたくさんした、しかし、体調がよくなったら、求めてきても応じなかった、そうしたら「あれ?」という表情をした〈連続的な安定が必要〉</p> <p>③学校で、わかって待ってもらえずに、次々と指示があり、引っ張られている</p>

からの映し返しともいえるし、子どもの行動をこのように読み取っている母親の能力が重要であるともいえる。

ここに述べた親子両者の映し返しは、アタッチメントの進展とも並行していた。7-③「鼻血が出たので世話したら、うれしそうにしていた、具合が悪くなると世話されるのでうれしそうにする、足が痛かったようで、『イタイイタイ』と言う、私が手を見せて、『この手で教えて』と言ったら、自分の足にその手を持って行って『イタイイタイ』と言った、『いたいのいたいの飛んでけー』と言ったらニコニコしていた」との発言から、子どもからの素直なアタッチメント行動と、これを受ける母親の対応、そして、通じ合うコミュニケーションが見て取れる。また、8-③「遊ぶことを求めてくる、そのため、意外と食べるものが減った」も、子どもの側からのアタッチメント行動の増加を示している。

親子の相互映し返しと、アタッチメントの形成の動きが進む中で、自我の発達も見えやすくなってくる。7-①「予定が違っていると確認してくる、(例) 弟が今日調子が悪くて相談についてこれなかった、それで相談にい

かないのではないかと思ったのか『今日学校?』と確認してきた」の発言は、未熟ながらも、子どもなりの見通しがもてるようになってきていることを示している。また、8-⑤「遊びに行き、待ち合わせ場所を教えたら、そこで待っていた(それまでは、私の目の前から消えることはなかった)」は、自我の発達と、分離—個体化の動きが進んでいることの現れといえる。そのほかにも、8-①「運動会で最後まで走った」の発言も自我の発達を反映していると解釈できる。

このように全体的にはうまく進んでいるのであるが、母子関係はなかなか安定しない面もあった。9-①「弟を羽交い絞めにする、口を押さえる、それで私が強くしかった。その後近くに来ない。私は、嫌われていると思って、さびしさを感じる。夜になって、自分のそばに来るかなと思っていたら、やってきた。しかし、また離れていった」や、12-②「私の方が子どもにかかわりを求めたい気持ちが強くなってきた、子どものことを知りたい、この子の世界を知りたい、付き合いたいという気持ちが強くなってきた、それなのに、こちらが発することを子どもが理解してくれなくて、いらいらすることがある」、13-②「体調が悪いときに、おんぶ、だっこ、話しかけをたくさんした、しかし、体調がよくなったら、求めてきても応じなかった」という発言があり、母親は不安になる。それで、9-②「不安が一杯」ということで、次の10回に母親だけの面接を入れた。また13-②のように〈連続的な安定が必要〉とも説明した。

ここまで面接前期、中期とみてくると、母親の共感や映し返し機能は、比較的速やかにできるようになっているように見えるが、母親は苦勞しながら進めていたようであった。12-③「先に先にと考えて、これを教えよう、あれを教えようとしてやってきた、自分がしっかりしなければ、と思いながら相手をしてきたので、楽しいとは思えなかった」という発言や、13-①「子どもが要求してきたときに(教えようとして)『口で言ってごらん』と言うので、要求してこなくなったのか? その一方で、わかって

さっさと対応することをしていた」との発言は、母親として、子どもを育てたい、教えたい、という気持ちの強さを感じさせるものである。このような母親の行動は、自閉症児を育てている母親にはよくあることなので、〈そういうことはよくあることですな〉と応じた。前述した、母子関係がなかなか安定しないこととあわせて、関係を作りにくく、なかなか母親を安心させてくれない子どもとの子育ての中で味わった母親としての傷つきがあるのであろうと考えながら、話を聞いていた。

(3) 面接後期(1年から1年7ヵ月)

後期になって、母子の情緒的交流は増加し、コミュニケーションもわかりやすくなってきた。このような中で、14回目の面接において、次のような発言が母親からあった。14-①「自閉症には心の理論がないといわれたが、ここに来て(この時点になって)あの子に心があることがわかってきた、あの子はわかってやっているんだと思えるようになって、あの子の気持ちをわかってあげようと思うようになった」と。これは母親にとって大きな気づきだったと思う。しかし、この発言がある前から、1回目の面接において、1-①「この子の目線から、抱きしめてほしいのかなと思うことがある」、あるいは、6-⑤「わざとではいけないことをする、かかわってほしいときに困らせることをする」と発言しており、子どもが計算して動いていることを理解していることになる。おそらく、子どもの表現がよりわかりやすくなり、また、母親の方も、子どもの心の動きが読み取りやすくなったので、「心の理論がある」、「心がある」という発言になったのだと思われる。子どもの心の動きの読み取りやすさは、21-④「スーパーに連れて行っても楽になった、この子の反応が見えてきて、張り合いがある、だから、対応する工夫もできる」という発言にも現れている。

さてこの段階になって、母親の映し返し機能、子どもの心に語りかけることはさらに上達し、話し方のコツも身に付いてきたように見受けられ

表 3

	母親の話と、それに対する面接者の対応　〈 〉は面接者の発言
14回	①自閉症には心の理論がないといわれたが、ここに来て(この時点になって)あの子に心があることがわかってきた、あの子はわかってやっているんだと思えるようになって、あの子の気持ちをわかってあげようと思うようになった。あの子はわかっていることがたくさんある、しかし、表現できないだけだと思えるようになっていて、なんとかあの子のもっているものを伸ばしてあげたいと思っている
15、16回	①子どもに近づいてほしいという気持ちと、近づかれていますと離れてほしい気持ちが動く ②自己主張が強くて半端じゃあない(具体的な対応について、両親が一致するように教育的に対応した)
17回	①両親で具体的な対応について話し合って、とりあえず一致した ②休まずに学校に行かないとサンタさんこないよ、と言ったら、クリスマスまで休まないで行った ③今朝なぜかはわからないが急に泣き始めた、それで、少しずつ近づいて、横になって、ずっと背中をさすっていた、「お父さんが仕事にいて悲しいの」などと話しかけた、1時間くらいそうしていた、そうしたらおさまった〈その相手の仕方はいいと思う〉〈そのときの泣き方がめめそなのでいいと思う〉〈子どもが感じていることをこれまでは察して対応してきているが、それに加えて、感じていると思うこと、考えていると思うこと、やろうとしていると思うことを理解して、それを「……だね」と言葉で伝えるといいと思う〉
18回	①車の中で親の気を引くように言葉がでてくるようになった、「あーお話ししたいのかな」と思う、私も話し掛けるようにしている「お月さんが出ているね」などと ②見通しがつかないといやなのか、気持ちが納得するために時間がかかるのか、意思をはっきりさせているのか、よくわからない自己主張が強くなり、自分の思いが通じるまで言い続けるようになった ③この日はなんとなく二人で通じ合えるなと思っていたら、「かあさん、歌って」と言ってきた、歌ってやって止めると、また「歌って」と言う、私が「〇〇(子どもの名前)歌って」と言うと、歌ってくれる、こういうときがあるとこの子にはいいんだなと思った
21回	①寝るときに「お母さんのとこいる」と言う、寝るとき母の方を向いている(今までは背を向けていた)、足をすりすりしてくる、子どもの方からのスキンシップが増えた ②ままごとをして一緒に遊ぶことがある ③学校では担任を日を追うようになった、言葉の数が増えた、「学校行く」という、学校で下級生の手を引いて散歩に行くようになった ④スーパーに連れて行っても楽になった、この子の反応が見えてきて、張り合いがある、だから、対応する工夫もできる

⑤ゆっくり、ゆったり話しかけることがある、「お母さんは怪我するのがいやなんだよ、だからしかるんだよ」というと、黙って聞いている、本人に伝わることを意識して弟に話しかける、「お兄ちゃんのこと(お母さんが)好きなのに、(お兄ちゃんは)言うことを聞いてくれないんだよ」、「お母さん心配なんだよ」と、本人は静かにして聞いている

た。たとえば、17-③「今朝なぜかはわからないが急に泣き始めた、それで、少しずつ近づいて、横になって、ずっと背中をさすっていた、『お父さんが仕事にいて悲しいの』などと話しかけた、1時間くらいそうしていた、そうしたらおさまった」や、18-③「この日はなんとなく二人で通じ合えるなと思っていたら、『かあさん、歌って』と言ってきた、歌ってやって止めると、また『歌って』と言う、私が『〇〇(子どもの名前)歌って』と言うと、歌ってくれる、こういうときがあるこの子にはいいんだなと思った」。あるいは、21-⑤「ゆっくり、ゆったり話しかけることがある、『お母さんは怪我するのがいやなんだよ、だからしかるんだよ』と言うと黙って聞いている、本人に伝わることを意識して弟に話しかける、『お兄ちゃんのこと(お母さんが)好きなのに、(お兄ちゃんは)いうことを聞いてくれないんだよ』、『お母さん心配なんだよ』と。本人は静かにして聞いている」などがそうである。前者の例は、子どもの心への言及、映し返しであるが、後者の例は母親の心を子どもに伝える映し返しである。心に通じやすい話しかけ方というのは、大体が、ゆったりしていて、ゆっくり話しかける方法であるが、そのことを母親は自分で発見したようであった。もちろん話しかけ方が大切なのではなく、話しかけるときの気分がゆったりしていることの方が大切なのであるが、そのことも理解されたようであった。このように母親が変化してくると、面接者は特にいうことがなくなるが、あえて、17-③〈その相手の仕方はいいと思う〉〈そのときの泣き方がめそめそなのでいいと思う〉、〈子どもが感じていることをこれまで察して対応してきているが、それに加えて、感じていると思うこと、考えていると思うこと、やろうとしていると思うことを理解して、そ

れを「……だね」と言葉で伝えるといいと思う」と応援した。

ところで、子どもが発達するときには、親からすると困ることも同時に出現するのが普通である。後期では、子どもの自我の発達につれて、自己主張が強くなってきて、母親を困らせることがみられるようになった。17-②「休まずに学校に行かないとサンタさんこないよ、といったら、クリスマスまで休まないで行った」というのは、自我発達のよい面である。一方、15、16-②「自己主張が強くて半端じゃあない」や、18-②「見通しがつかないといやなのか、気持ちが納得するために時間がかかるのか、意思をはっきりさせているのか、よくわからない自己主張が強くなり、自分の思いが通じるまで言い続けるようになった」は、困ったこととして話されている。面接者は、このへんのことは、自我が発達してくると、自律的に振舞うことも増えてくるが、それと並行して自己主張が強くなることがあると説明しながら、同時に具体的な対応について話した(16, 17回)。

この段階ではさらに、21-②「ままごとをして一緒に遊ぶ」との報告もあった。これは、言葉遊びよりも、相手とイメージを共有して行う行為であり、子どもが母親にイメージを通わせていることと、母親からの子どものイメージへの接近の両方がある、なされていることである。

Ⅲ 考察

Shoplerら(1993)は、自閉症の問題の中核が、コミュニケーションや社会的相互作用の特殊性であることを指摘し、その改善に向けた早期からの対応が必要であるとしている。これは、自閉症理解の時代的変遷を表しており、行動療法的対応から、情緒を中心においた対応へと、取り組みを調整する必要があることを示唆しているといえる。いうなれば、外からの取り組みというよりも、自閉症児の内側からの心の構築、発達をねらった取り組みが重視されるのである。そのためには、これまでの乳幼児研究で蓄積されたアタッチメントと感情発達、情動制御の発達、自己の発達の知

見を、自閉症児への対応に使うことが有益であると筆者らは考えている。小林(2000)も、自閉症の親子の関係障害、愛着形成障害に着目した自閉症の母子への発達早期からの取り組みを行っているが、コミュニケーションの発達、社会的相互交渉の発達、自我の発達などにおいて成果を得ている。

今回筆者らは、小学生の自閉症児の親子について、母子並行面接の形で対応した。その際、子どもへの対応も、母親への対応も、従来の心理療法や母親面接の機能に加え、子どものメンタライゼーションと自己の組織化をねらった、映し返し機能を重視したかわりを行った。本論文では、母親面接についてのみ報告したが、面接過程の中で、母親の映し返しが増えること、アタッチメントとマターナル・アタッチメントの安定方向への変化、子どものメンタライゼーションの発達が見られた。

なお、ここでの考察においては、アタッチメントを子どもから母親に向かう愛着、マターナル・アタッチメントを母親から子どもに向かう愛着として区別して使うこととする。また、母子の関係を見るには双方向からの見方が必要であるが、その点、SameroffとEmde(1989)の早期関係性障害の概念が、母と子の間にある関係性にスポットをあてて、その特質を理解し、障害の改善に対応することを考えていることから、「関係性」を母子の間にある関係を論じる際に使うことにする。

1. 関係性の変化と映し返し

面接開始当初、事例の親子は、自閉症児特有のコミュニケーションの難しさから、母親が近づくと子どもが離れ、子どもが近づいてくると母親が離れるというように、お互いに関係を求めているながら満たされない関係性にあった。これは関係性障害(Sameroff & Emde, 1989)に陥っていたものと思われる。また「ピュアーに反応する」「こっちを見抜いている」(2回)という母親の発言のように、互いに絡み合った関係にあった。これは、いう

なれば、母親と子どもが相手を読みすぎていることから生じていたことでもあった。そこで、面接者は、先の面接経過の中で述べたように〈お互いに関係はある〉と保証した。また、〈しかし感情が絡み合っている〉〈近い距離にいて絡み合っている〉と関係性の特徴を明確化した(2回)。その結果、母親は関係性について少し安心し、心のゆとりができた(3回)。また、心理的に「煮詰まって」団子状態であった近い関係から、やや距離のある関係に動いた可能性がある。それによって、子どもからのアタッチメント行動が増え、マターナル・アタッチメントが良好な方向に動き出した。

これを受けて、母親の映し返し機能がより発揮されるようになった。すなわち、それまで困った行動と思われていた、子どもが自分の世界に入る行動を肯定的に見ていられようにもなった(6回)。また、ドライブの例のように(5回)、子どもの行動の意味の読み取りが、正しくなった可能性がある。また他のこととしては、子どもの心的状態への映し返しが、子どもの興奮を和らげ、情動調節の機能を果たすことも確認された(17回)。おそらく、このような対応が多くなされることが、子どもの自己制御能力を発達させるのだと考えられる。このように母親からの子どもの心的状態の映し返しが機能すると、今度は子どもの方から母親の心的状態を映し返す行動が表れた(7回)。また、子どもの自己表現が増えてきた。これは、自己の組織化のあらわれであろうと考えられる。すなわち、映し返しによって、子どもの心的状態が明確になってきたのである。

さらに、母親の映し返し機能であるが、子どもの心的状態だけでなく、子どもに自分自身の心的状態を伝えることも確認された(21回)。これは、子どもの母親理解に役立つものと思われる。

以上 Fonagy ら(1997, 2002)が主張しているように、母子相互の映し返しがこの母子の間で生じ、母親からの、子どもの世界への接近、子どもの感情の明確化、感情の調節行動、子どもに母親の心的状態を知らせること、が行われるようになったといえる。これを受けて、子どもの自己の組織化

の現われとして、自己主張が明確になってきた。この結果をみると、適切な映し返しが継続すると、子どもの心の発達が良好に進むのではないかということが予想される。

ところで、映し返しと関係性、アタッチメント、マターナル・アタッチメントは並行して動くものと思われるが、本事例をみる限り、関係性の変化が先に動き出しているように見受けられた。関係性が肯定的な方向に動き、マターナル・アタッチメントが強くなったことを受けて、母親の映し返しが増えたようにみえるのである。ただし、次のように考えることもできる。すなわち、もともと母親は映し返しの能力があり、そうしたい気持ちは強かったのであるが、二人の関係性がネガティブなものになっていたために、うまくできなかったのであると。ところが、面接の機会が与えられ、母親が「目標、方向性がわかるようになったから」(5回)というように、母親が少し落ち着いたことで、子どもと接するときの気持ち楽になり、そして、本来もっていた映し返しの能力を使えるようになったのかもしれない。このように考えると、面接をみる限り、まだ母子の関係性は強固に安定しているわけではなく、揺れ動きやすい状態にあることがわかる。したがって、今後も継続的に面接を続けることが必要であり、それによって、関係性が不安定な方向に動くことを予防し、映し返しが継続されることを期待したい。

2. メンタライゼーションの発達

Fonagy ら(1997, 2002)は、映し返しは、子どもが他者の行動、信念、感情、態度、願望、希望、知識、想像、ふり、嘘、意図、計画などに応じることを可能にする能力、他者の心を読むことを可能にする能力、他者の行動が意味づけられ、予測可能なものにする能力、すなわちメンタライゼーションの発達を促すとしている。本事例でも、子どもの行動と意思について母親の読み取りが正確になり、そして、読み取ったことを映し返すこと

が増えてきている。それを反映して子どもの方には、「ふざけて言葉遊びをする」(4回)、「予定が違っていると確認してくる」(7回)、「遊びに行き、待ち合わせ場所を教えたなら、そこで待っていた」(8回)、「ままごと遊びをした」(21回)などの発言が、子どものメンタライゼーションとして母親から報告されている。言葉遊びは、お互いに正しい言葉がなにであるのかわかっていながらわざと言葉を微妙に換えていって、そのおかしさを共有して楽しむ遊びである。お互いに相手の意図を読むことができなければ楽しめないのが、メンタライゼーションの典型であるといえる。さらに、このことは心の理論が存在している証拠であるともいえるが、「自閉症には心の理論がないといわれていたが、あの子に心があることがわかった」(14回)という母親の発言は、母親が子どものメンタライゼーションを実感として感じたことを表しているといえる。ただし、本当に心の理論があるというためには、他者の心の状態を予測するだけではなく、他者の誤信念(その人が現実の状況とは違うことを事実だと思っていること)を理解しなければならないといわれているので(内山, 水野, 吉田, 2002), その点の確認が必要であろう。なお、自閉症児が誤信念課題を達成するのは、語彙理解が9歳以上になってからであるとする報告もある(Happé, 1995)。心の理論についてはまだ検討しなければならないが、この事例をみると、母親が安定した関係性の中で、正しい映し返しをすることの重要性が改めて認識される。

安定したアタッチメントは心の組織化に役立ち、自我発達を助けるという Sroufe と Waters(1977)の見解をより発展させる形で Fonagy らは理論化しているが、上述した子どもの行動の変化をみると、アタッチメントとメンタライゼーションの関連性が改めて理解される。

ところで、メンタライゼーションとともに、自己の組織化も、映し返しによって発達が進むとされているが、子どもの自己主張の強まりは、自己意思、意図の明確化と関係があり、メンタライゼーションと自己の組織化

の表れとして理解できる。ただし、自己主張の強まりは、母親にしてみると、新たな悩みを生み出すことになった。発達的には、自己統制よりも自己主張が先であるのが普通である。また、自己主張の強まりは、自我の発達と並行しているものである。このことを理解していても、親は困らされることになる。これに対しては、面接の中で対処法を具体的に話し合った。

3. 面接技法

母親の映し返しを促進するために面接者が特に注意した点としては、親子の相互作用を具体的にたくさん聞いたことをまず挙げることができる。現時点でのお互いの間でのやりとりだけでなく、これまでの子育ての過程でお互いの間に流れていた感情の動きにも注目しながら、共感的に話を聞いた。そして、母親の気持ちに共感して言葉で伝えた。これは、母親の気持ちへの映し返しであるといえる。さらに、関係性について理解したことを明確化して言葉で伝えた。これも、親子の関係性に関するある種の映し返しであるといえる。いうなれば、これらの対応は、母子の間で映し返しが盛んに行われることを意識して、母親と面接者が面接室の中で映し返しを行ったと理解することもできる。ほかには、おりにふれて、子どもの気持ちなどの心的状態を理解し、それを言葉にして語りかけることを勧めた。これは、広い意味で教育的対応であった。しかし、もともと、自己の気持ちや考えを表現する能力が高かった母親であったので、面接者のこのような対応がなくても、母子関係が安定化しさえすれば十分に語れた可能性はあったと思われる。

さらに、母子の関係が安定すると、映し返しが活発になることと同じように、母親と面接者との関係の中で、母親が安心感を得ることができることを心がけた。それによって、母親の自己の映し返しが増えることを考えたが、この面接態度は自閉症児の親だからということではなく、すべての面接に共通することであった。しかし、この態度こそが最も重要であると

認識している。

(本研究に協力していただき、貴重な資料を提示することを許していただいた相談事例の家族に感謝します。また子ども担当者および観察者として本研究に参加した大学院生の鷺山英之君，五十嵐庸介君，中津大介君にも感謝します。なお，本研究は，専修大学から平成15年度研究助成として補助を受けた研究の一環であることを付記し，研究助成に感謝します。)

文献

- Ainsworth, M.D., Blehar, M., Waters, E., et al. 1978 Patterns of attachment : A psychological study of the strange situation. Lawrence Erlbaum Associates.
- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss, vol. 1 Attachment. Hogarth Press. 黒田実郎，大羽葵，岡田洋子訳 1976 母子関係の理論1. 岩崎学術出版社.
- Calkins, S.D. 2004 Early attachment processes and the development of emotional self-regulation. R.F.Baumeister & K.D.Vohs (Eds.) Handbook of self-regulation : Research, theory, and applications. 324–339. The Guilford Press.
- Dunn, J., Brown, J., Slomkowski, C., et al. 1999 Young children's understanding of other people's feeling and beliefs : Individual differences and their antecedents. *Child Development*, 62 , 1352–1366.
- Fonagy, P. 1997 Attachment and theory of mind : Overlapping constructs? Association for Child Psychology and Psychiatry, Occasional Papers, 31–40.
- Fonagy, P., Steele, H., Morgan, G., et al. 1991 The capacity for understanding mental states : The reflective self in parent and child and its significance for security of attachment. *Infant Mental Health Journal*, 13, 200–217.
- Fonagy, P., Target, M. 1997 Attachment and reflective function : Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*. 9, 679–700.
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E.L., et al. 2002 Affect regulation, mentalization, and the development of the self. Other Press.
- Happé, F.G.E. 1995 The role of age and verbal ability in the theory of mind task performance of subjects with autism. *Child Development*, 66, 843–855.
- 河合健彦，奥山玲子 2003 自閉症幼児と母親への精神療法的かかわり. *精神療法*, 29, 5, 551–560.
- 小林隆児 2000 自閉症の関係障害臨床. ミネルヴァ書房.
- McCarthy, G. 1998 Attachment representations and representations of self in re-

- lation to others : A study of preschool children in innercity London. *British Journal of Medical Psychology*, 71, 57-72.
- Main, M., Solomon, J. 1986 Discovery of a new insecure-disorganized/disoriented attachment pattern. In T.B. Brazelton, & M.Y. Yogman (Eds.) *Affective Development in infancy*. 95 -124, Ablex Norwood.
- 永井洋子 2002 自閉症の理解と支援. 太田昌孝編 発達障害児の心と行動 149-165, 放送大学教育振興会.
- Sameroff, A.J. & Emde, R.N.(Eds.) 1989 *Relationships in early childhood : A developmental approach*. Basic Books. (小此木啓吾監修, 井上果子訳者代表 2003 早期関係性障害. 岩崎学術出版社)
- Schopler, E., Van Bourgondien, M.E., Bristol, M.M. 1993 *Preschool issues in autism*. Plenum Press. 伊藤英夫監訳 1996 幼児期の自閉症：発達と診断および指導法. 学苑社.
- 園田菜摘 1999 3歳児の欲求, 感情, 信念の理解：個人差の特徴と母子相互作用との関連. *発達心理学研究*, 10, 177-188.
- Sroufe, L., Waters, E. 1977 Attachment as an organizational construct. *Child Development*, 48, 1184-1199.
- van-der-Kolk, B.A., Fislser, R.E. 1994 Childhood abuse and neglect and loss of self-regulation. *Bullten of Meninger Clinic*, 58, 145-168.
- Whitman, T.L. 2004 *The development of autism : A self-regulatory perspective*. Jessica Kingsley Publishers.
- 内山登紀夫, 水野薫, 吉田友子 2002 高機能自閉症, アスペルガー症候群入門. 中央法規.
- 山崎晃資 1998 II 自閉症 A 乳幼児期. 松下正明編 臨床精神医学講座第11巻 児童青年期精神障害. 61-75, 中山書店.
- 吉田弘道 2000 a 児童心理臨床における感情発達の援助：発達心理学の研究知見に学ぶ. *専修大学心理教育相談室年報*, 6, 26-31.
- 吉田弘道 2000 b 情緒面をどう育てるか：人との相互作用を通して. *小児科臨床*, 53, 増刊号, 1223-1226.